

2023 年度秋季大会（九州大学）の記録

九州大学 岩田 健治

九州大学 前田真一郎

日本金融学会 2023 年度秋季大会は、9 月 30 日・10 月 1 日の両日、九州大学伊都キャンパスで開催された。共通論題、多くの自由論題に加えて、金融史パネル、中央銀行パネル、特別セッション（日本金融市場の競争力強化に向けて）が開催され、さらに特別講演では植田和男日本銀行総裁にご登壇いただいた。新型コロナウイルスまん延前に匹敵する多数の研究者や実務家が、会場で活発な討論を交わした。

【金融史パネル】

今回の大会では第 1 日目に、自由論題とともに、パネル、特別講演、特別セッションが行なわれた。

金融史パネルは、邊英治会員（横浜国立大学）、永廣顕会員（甲南大学）を座長・副座長として、「中華民国における近代的銀行業・保険業の勃興」がテーマであった。李培徳氏（華僑大学）、徐琳氏（上海社会科学院）の報告があり、菅原歩会員（東北大学）が討論者を務めた。セッションは、すべて英語で行われた。フロアとの間も含めて議論になったのは、なぜ日本やロシアなどではなく、上海や香港が選ばれたのか、米国が果たした役割は何だったのか、生命保険業務への参入の理由や競合関係、AIA を含めて香港が世界の主要な金融センターになった経緯などであった。

【特別講演】

特別講演は植田和男日本銀行総裁より、「中央銀行の財務と金融政策運営」をテーマとしてご講演いただいた。まず、金融政策を適切に運営することにより、通貨の信認は日本銀行法にも定められている「物価の安定」を図ることを通じて確保されるものであるとの確認がなされた。その前提のもとで、各国中央銀行は、通常、収益が確保できる構造にあり、支払決済手段を提供することが可能であり、一時的に赤字や債務超過になっても、政策運営能力は損なわれないことが示された。他方で、「中央銀行の財務リスクが着目されて金融政策を巡る無用の混乱が生じる場合、そのことが信認の低下につながるリスクがある」点についても指摘され、「財務の健全性にも留意しつつ、適切な政策運営に努めていくことが適当である」とまとめられた。司会は福田慎一本学会会長（東京大学）が務めた。

【特別セッション】

特別セッションは、清水啓典会員（一橋大学名誉教授・本学会元会長）が座長を務め、小倉

義明会員（早稲田大学）、安田行宏会員（一橋大学）、植杉威一郎会員（一橋大学）、清水順子会員（学習院大学）が報告、討論者は福田慎一会長であった。「リスク負担が不可欠な社会環境の下で、それに挑戦する企業家精神や政治的リーダーシップとそれを支援する変革の必要性が社会の共通認識となる必要がある」との清水啓典座長のお言葉に、共感・共鳴する会員も多かったのではないだろうか。なお、このセッションは「金融調査研究会」で積み上げられてきた議論、成果をもとに開催がなされた。

【中央銀行パネル】

第2日目には、第1日目に続いて、自由論題とともに、中央銀行パネルと共通論題が開催された。

中央銀行パネルは、白塚重典会員（慶應義塾大学）、柴本昌彦会員（神戸大学）を座長・副座長として、「AI、ビックデータと金融」をテーマに、北村行伸会員（立正大学）、宮川大介氏（早稲田大学）、瀧俊雄氏（マネーフォワード）より、報告がなされた。AIやビックデータが汎用基幹技術（General Purpose Technology）になりうるのか、既存の決済や金融仲介サービスをどう変えていくのかといった論点を中心に討論がなされた。近年の世界を席卷する大きな問題に対して、学界と実務界の双方向より、多面的な接近と深い分析が試みられることになった。

【共通論題】

プログラムの最後になる共通論題では、「SDGs・ESGと地域金融」をテーマに、家森信善会員（神戸大学）・新田町尚人会員（福岡大学）を座長・副座長とした運営のもと、馬奈木俊介氏（九州大学）が基調講演を行い、その後、同氏と平田慶介氏（福岡銀行）、須藤浩氏（信金中央金庫）、野崎浩成会員（東洋大学）、高屋定美会員（関西大学）がパネリストとして登壇した。家森座長による「日本社会の脱炭素化やSDGs対応を進めるには、中小企業の取り組みを加速化することが重要」「しかし、資本市場を通じて中小企業に働きかけるのは難しく、地域金融機関の役割が期待されている」との開催趣旨に沿って、地域金融機関の現場の取り組みや課題について示唆に富む議論が展開された。

大会では上記の他にも41本の充実した自由論題報告が二日間にわたってなされ、会員が一堂に会し、議論を展開する貴重な機会になった。

